令和三年度　弘学館入学試験

高等学校　国語問題

一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

①「よいひと」とはどんなひとをいうのだろうか。

たいていの人間に期待できそうなことはきちんとしてくれるひと。そういうひとは信頼できる。よいひとと呼んでよい。他人のためになるが誰もがするとはかぎらないことに尽力するひと。それならますますそうだ。こういうひとはむしろ、立派なひと、尊敬すべきひとと呼べそうだ。そういうひとが大勢いれば助かるし、よいひと自身も他のよいひとに助けられ、みながその恩恵にaヨクする。だから、以上のタイプのよいひとは、私たちが一緒に生きていくのに役立つひとのことである。

ところで、私たちは別のタイプのひとも立派に思い、尊敬する。たとえば、自己bタンレンを怠らぬアスリート、創作に没頭する芸術家、つねに工夫を凝らす職人、などなど。自分の生き方をみずから選びとって精進している点に、私たちは感心する。

②道徳と倫理は同じ意味で使われる場合もあれば、使い分けられる場合もある。使い分けられるときのその違いは大まかにいって「よいひと」の意味のこの二つの要素に対応している。道徳とは、私たちが一緒に生きていくために守るべき行為規範の体系である。私たちの共同生活の破綻を防いだり（たとえば、「ひとを傷つけてはいけない」）、共同生活をいっそう有意義にしたり（たとえば、「ひとには親切にすべし」）する教えがそこに含まれている。

これにたいして、倫理は本人の生き方の選択に関わる。先に挙げたアスリートや芸術家の例にかぎらず、誰もが自分の人生を選んでいる。だから、倫理に含まれる教え（たとえば、「自分の能力を伸ばすべし」「自分の一生を大切にせよ」）もどのひとにもあてはまる。

「道徳と倫理のそういう使い分けは初耳だ」といわれるかもしれない。もっともだ。その違いはラテン語の mos とギリシア語の ethos に由来する。どちらも慣習を意味するが、ethos のほうは気高い性格という意味も含意する。「道徳」という日本語はラテン語起源の、英語でいえば moral の訳語にあてられる。「倫理」という日本語はギリシア語起源の、英語でいえば ethic の訳語にあてられる。

だから、日本語の道徳と倫理という語に上のような区別はもともとないけれども、ラテン語とギリシア語のこの語源を反映させて、世間のきまりを遵守する生き方を道徳的、※1矜持ある生き方を倫理的と呼び分けることができる。

上の説明では、世間のきまりに自分が従うか否かの倫理的決断が自由にできるように聞こえるかもしれない。その点を強調する思想もある。自分で自分の生き方を選ぶ決断を※2称揚する実存主義がそれであり、ひとえに自己に誠実であることを重視する。

けれども、私たちはたいてい生まれ育ってきた環境に影響されて自分の生き方を選んでいる。すると、③生き方の選択に関わる倫理と世間のきまりという意味の道徳は、結局、同じことに帰着するのか。いやそうではない。道徳について説明したときに用いた「私たちが一緒に生きていく」という語句に注意しよう。日常に使う言語、生まれ育つなかで身につける習俗や文化の伝統、さらには宗教がほぼ一緒のひとたちからなる結びつきを共同体と呼ぶ。これにたいして、文化や伝統や宗教が違っていてもその違いから相手を否定することなく一緒に生きていけるようにする結びつきを社会と呼ぼう。

近代化とは、価値観を共有する者たちから成る共同体が価値観の異なる人びとに開かれてゆく過程である。現代の多くの国々は母語が異なる移民を受け容れている。こうした価値多元社会では、誰でも自分がよいと思う生き方を追求してよいし、本人が選んだ生き方を尊重すべきだという考えが社会に共通の規範として認められている。この規範は道徳に属す。

これにたいして、多様な生き方の選択肢とその選択肢のなかから自分の生き方を実際に選ぶことは――自分が生まれ育った共同体のなかで身につけた生き方を選ぶ場合もあれば、あるいはそれに反発して社会のなかで見聞した別の生き方を選ぶ場合もある――倫理に属す。たとえば、「私はカトリックの教えにしたがって生きる」という決断は倫理に属し、「他のひとは別の宗教を信じてよいし、何の宗教も信じなくてもよい」という態度は道徳に属す。

先に道徳を世間のきまりと呼んだが、世間という語は共同体を連想させるかもしれない。正確にいえば社会のきまりである。だから、「　A　」や「長いものには巻かれろ」という教えは、同質性を好む共同体のなかでcマサツなく生きていくための実用的な知恵ではあっても、自分で考えることを放棄しているから上記の意味での倫理ではないし、他人の生き方へのdヨクアツにつながる点で上記の意味での道徳でもない。

すると、こうした教えがいまだに力をもち、ギリシア語やラテン語に由来する区別がもともとない日本では、倫理も道徳も結局は「既存の慣習に順応せよ」という命令にすぎないのではないか。その点の検討は大切である。とはいえ、そういうeギネンをもつことのできたひとは、これまで説明されてきたことを理解したからこそそう問うたわけだ。その説明は日本語でなされた。だから、④倫理と道徳の違いや近代社会の価値多元主義を日本語で思い描くこともできるはずである。

さて、以上のように倫理と道徳とは使い分けられるのだが、他方で、⑤倫理と道徳はほぼ同じ意味でも使われている。というのも、よいひととは、力点が置かれる程度の差はあれ、二つの要素を兼ねそなえたひとのことだからである。

たとえば、本人が選んだ生き方のせいで他人の不利益や危害を招くひとは、よいひとだとはとてもいえない。逆に、すべきことをきちんと果たしていても、その行為が正しいとか相手のためになると自分で判断してそうしたのではなく、他人の指示や非難や賞賛に動かされてしたのなら、よいひととはいいがたい。そういうひとは間違った対応はしなくても、故障していない機械をあてにする程度にしか信頼できない。

※1　矜持――誇り。　※2　称揚――誉めたたえる。

（品川哲彦『倫理学入門』設問の都合上一部本文を省略した）

問1　二重傍線部a～eのカタカナを漢字に直せ。楷書で大きく書くこと。

問2　傍線部①「『よいひと』とはどんなひとをいうのだろうか」とあるが、「よいひと」とはどんなひとか。「ひと」に続くように本文中から二十字程度で二カ所抜き出せ。

問3　傍線部②「道徳と倫理は同じ意味で使われる場合もあれば、使い分けられる場合もある」とあるが、「使い分けられる場合」のそれぞれの説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから選び、記号で答えよ。

ア　道徳とは共同生活を有意義にするための規範であり、これに従って共同生活を改善していくことを道徳的な生き方と呼ぶ。倫理とは各自が誇りを持ってそれぞれの生活を自力で改革することであり、このような生き方を倫理的と呼ぶ。

イ　道徳とは一緒に生きるための規範の全体であり、この体系をきちんと整えて意義あるものにしていくことを道徳的な生き方と呼ぶ。倫理とは一人一人が自負心をより強く持って人と競っていくことであり、このような生き方を倫理的と呼ぶ。

ウ　道徳とは人びとが一緒に生きる上での規範の全てであり、これらを厳密に守って生活を壊さないことを道徳的な生き方と呼ぶ。倫理とは人に誇れるような自分自身の生き方を作っていくことであり、このような生き方を倫理的と呼ぶ。

エ　道徳とは共同生活をする上での規範であり、これを守って共同生活をよりよいものにしていくことを道徳的な生き方と呼ぶ。倫理とは一人一人がプライドを持って個人の人生を選んで生きていくことであり、このような生き方を倫理的と呼ぶ。

オ　道徳とは私たちが一緒に生きるための規範であり、この数を増やして共同生活を向上させ続けていくことを道徳的な生き方と呼ぶ。倫理とはプライドを高く持って個人の生活を最優先にして生きることであり、このような生き方を倫理的と呼ぶ。

問4　傍線部③「生き方の選択に関わる倫理と世間のきまりという意味の道徳は、結局、同じことに帰着するのか」とあるが、これはどういうことを言おうとしているのか。その説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから選び、記号で答えよ。

ア　私たちは生まれ育ってきた世間に強く影響されるので、自分では集団の制約を逃れて倫理的な生き方をしたいと思っても、現実には世間で定められた道徳を遵守しなければならないはずだということ。

イ　私たちは生まれ育ってきた人間関係に影響されるので、自分では人と違う独特の倫理的な生き方を選択しているつもりだが、結局は人目を気にして道徳上のきまりを守っているに過ぎないのではないかということ。

ウ　私たちは生まれ育ってきた世間の影響を受けるので、自分では倫理的に自分独自の生き方を選んでいるつもりでも、実際は世間の道徳的なきまりに無意識に従っているだけなのかも知れないということ。

エ　私たちは生まれ育ってきた自然環境の影響を受けるので、自分では人間社会の倫理に即した生き方を選んでいると思っているが、結果的に自然を壊さない道徳的な行動規範に沿っている可能性が高いということ。

オ　私たちは生まれ育ってきた風土の影響を強く受けるので、自分では倫理意識の高い生き方をしていると思っているが、本当は風土特有の道徳に縛られた生き方をしていることに気づいていないということ。

問5　空欄Aに「郷」から始まる適切なことわざを入れよ。

問6　傍線部④「倫理と道徳の違いや近代社会の価値多元主義を日本語で思い描くこともできるはずである」について次の二つの問いに答えよ。

［Ⅰ］「近代社会の価値多元主義」とはどういうものであるかを六十字以内で説明せよ。

［Ⅱ］また、［Ⅰ］のような社会において、「倫理と道徳」がどう違うのかを七十五字以内で説明せよ。

問7　傍線部⑤「倫理と道徳はほぼ同じ意味でも使われている」とあるが、この表現を通して筆者はどういうことを言おうとしているのか。その説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから選び、記号で答えよ。

ア　自分自身の決断も結果的に他人の不利益を招けば意味がなく、正しい行為も他人に動かされてするのならば意味がないので、立派な人になろうとすれば倫理と道徳の両方を兼ね備える必要がでてくるということ。

イ　自分で人生を選択する時にも他人の生活への配慮を怠ってはならず、他人のためになる正しい行為をする時にも自分で判断することが求められるので、倫理も道徳もそれぞれ双方の内容を含むことになるということ。

ウ　他人の不利益になる生き方を選ぶ人はよいひととは言えず、他人の指示に従って行動する人もよいひととは言えないので、道徳と倫理の両方を満たしている本当によいひとだけが人間として信頼できるということ。

エ　他人の利益になる行為をすることはよいことであり、自分で判断して選択することもよいことであるので、人から高い評価を受ける行為や選択には、倫理と道徳が区別できない形で備わっているということ。

オ　自分の判断で他人にとっても利益になる生き方を選んだり、人に指示されずに正しい行動ができたりする人だけがよいひとだと言えるので、そもそも倫理と道徳を分けて考えること自体が無意味であるということ。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

二十七歳の時、画家を志し単身パリに向かった「浜田画伯」は貧困のなか創作を続け、フランス画壇で注目される存在となった。近年、その絵が日本にも紹介されるようになるなか、S百貨店が彼の個展を企画し、そこで、画伯の初期作品のほとんどを所有するコレクター（喫茶店〔セザンヌ〕のマスター）に絵の借用を願い出た。しかし、画伯自身が来て選ばない限り貸さないとの返事だったため、渡仏以来初めて帰国した画伯は百貨店の美術部門の社員とともに〔セザンヌ〕に赴く。

〔セザンヌ〕は、目抜き通りから大分離れた町外れにあった。古い土蔵を改造した建物のようである。

「ほう、驚いたなあ。……あのまんまだ」

タクシーから降りたった浜田画伯は、建物の前で嘆声を発した。フランスの片田舎の農家を思わせる外観だった。白い漆喰の外壁一面に、たくさんの小さな植木鉢がぶら下げてある。それには、色とりどりの秋の花が咲いている。

「素敵ですねえ。よく手入れされていますねえ」

連れの青年も、道路に立ちつくして呟いた。

浜田画伯は、満面に笑みを浮かべて促した。厚く重い木の扉を開けると、白い壁に囲まれた奥行きのある店内にコーヒーの香りがa漂っていた。客のいない、がらんとしたなかに静かなピアノ曲が流れていた。――きれいに撫でつけた白髪。肥って真ん丸になった顔に、鼈甲縁の眼鏡。その眼鏡の奥で、細めた目をしばたたいていた。

「おやじさん。……しばらくでした。浜田です、分かりますか？」

老人は、ゆっくりと頷いてからいった。

「やあ、……お帰りなさい。よく帰ってきたね」

白い壁面には、数点の絵が飾ってあった。①青年は、それらに目を奪われていた。現在の作風よりかなり色調は粗いが、浜田画伯の初期作品であることは、美術部員の目には明らかだった。

「さっきは、いきなり、おやじさんって呼んでしまいましたね。……やはり、ここに来ると、すぐ昔に戻ってしまうんですな」

浜田画伯は、テーブルに老人と向かい合って、懐かしさをあらわにして喋った。まるで、二十二年前に返ったように、若々しい表情だった。

老人は言葉少なに微笑んで、相槌をうつだけだった。画伯を優しく見つめている目が濡れていた。画伯も青年も、それに気づいていた。

「おやじさんはね、あのころ、わたしの父親のような存在だったんだ」

浜田画伯は、自分も目の縁を赤くしながら、青年に語りかけた。

「わたしは、幼いときに父親を亡くしていてね。そのうえ、教師になってすぐに、母親にまで先立たれた。……身寄りがまったく無かったんだ」

〔セザンヌ〕に来るのだけが楽しみだった、と画伯は遠くを見る目をしていった。――中学校の授業のほかは、自分の絵を描くことに専念していたが、毎日のように〔セザンヌ〕に通った。絵の好きな主人と会って、話をするためだった。

「おやじさんは、親身になって相談にのってくれた。……くじけそうになっていれば、優しく励ましてくれた。いい絵が描けたときは、その絵を買い取って、この壁に飾ってくれた。パリに行く決心をしたときも、誰もが笑ったのに、おやじさんだけは賛成してくれた。それどころか、わたしの習作を全部買い取ってくれたんだ。……そうだ、おやじさん。思い出しましたよ。あのどうにもならない拙い作品を買い取ってくださったおかげで、パリ行きの費用が足りたのでしたね」

老人は、涙を拭いながら、深く頷いた。

二時間後、浜田画伯は自分の初期作品の列の前に立ちはだかって、選択をはじめていた。

全部で四十三点もあった。青年が次々に並べていく先から、②画伯はまるで他人の作品を品選びするかのように、素早く取捨していった。

見るに耐えないといった表情で、右手を荒々しく振ることも何度かあった。そんなとき、老人は自分の絵をb爪弾きされでもしたように、ひどく哀しい顔をした。

「どうも、なんとか使えるのは、四、五点しかないなあ。……おやじさん、もう残っていませんかね？　小品でもいいのですが」

老人は、しばらく躊躇ってから、カウンターの奥にある自室へ行った。しばらくして、小さな額縁入りの絵を持ってきた。

――それは、男の顔を描いたものだった。撫でつけた黒髪、中年の自信に満ちた表情。丸い顔に、鼈甲縁の眼鏡。

「ああ、これは面白い。……おやじさんの肖像じゃないですか。へええ、こんなの描いたことがあったのかねぇ。忘れてしまったなあ」

浜田画伯は両手をのばして、その絵をつくづくと見てから、仕分けたなかにc無造作に置いた。

「まあ、こんなところかな。……いやあ、若いころの勉強不足を見せつけられたようで、冷汗が出るなあ。おやじさんのおかげで恥をかかずに済みました。おやじさんの注文通りに、わたし自身で選択してよかったですよ」

浜田画伯は、老人に頭を下げた。老人は、黙然として画伯の様子を見つめていた。

三時間後、浜田画伯と青年は〔セザンヌ〕から大きな荷物を抱えて出てきた。電話で呼んだタクシーが建物の前で待っていた。

「おやじさんは、なんだか妙な感じだったな」
タクシーが走り出してから、しばらくして浜田画伯が呟いた。
青年から絵の借用書を受け取ったあと、老人はカウンターのなかに入ったまま、画伯のそばには近づかなかった。画伯たちが別れを告げたときも、③カウンターの向こうから、さようなら、お元気で、と二言だけ素っ気なくいっただけだった。
画伯は、老人の頑なで、寂しげな様子が気にかかっていた。
しかし画伯にしてみれば、充分に礼をつくしたつもりだし、別にX気に障ることをしたという覚えもない。もっとゆっくりできればよかったかもしれないが、それは予定にないことだ。
「お客さん。……違ったら、ごめんなさい。もしかして、浜田先生じゃありませんか？」
運転手が、いきなりいった。バックミラーのなかで目が合った。青年が隣で頷いた。
「やっぱり、そうですかあ。……わたしもセザンヌによく行きますのでね。あそこのマスターとは、長い付き合いなんですよ」
運転手は、嬉しそうに声を弾ませていた。
「……先生が帰ってらして、マスターは大喜びでしょう。半狂乱になってんじゃないかな。とにかく、浜田くん浜田くんで、たいへんなんですから。……あれは、おれの息子のようなもんだ。偉くなっても、きっとフランスから、ここへ帰ってくる。そういう約束になってるんだって自慢ばかりしてるんですよ、いつも」
Ⅰ浜田画伯は、胸を突かれる思いがして、青年と顔を見合わせた。
「今夜は、駅前のホテルにお泊まりなんですね？　マスターと積もる話に花を咲かせるんでしょうね」
運転手は、親しみを込めた目をバックミラーのなかから向けてよこした。浜田画伯は、曖昧に笑ってみせるほかなかった。
東京に帰った翌朝――
浜田画伯の滞在しているホテルの部屋に、M市に同行した青年から電話があった。
「おはようございます。朝から申し訳ありませんが、少々お伝えしたいことがありまして」
「何んだろう？　例の絵のことかね？」
「まあ、そうです。……じつは、セザンヌのマスターの肖像画ですが、額縁があまりに粗末なので、別のに替えようと思いまして」
「お任せするよ。適当に替えておいてください」
「はい。それは、すでに替えましたのですが、じつはその際に、興味あるものを発見しまして。……カンバスの裏に細かく書かれたフランス語です。おそらく、二十二年前に先生ご自身が書かれたものではないかと思われますが……」
「ほう？　……読み上げてみてくれないかな」
「はい。下手を承知で音読します」
「どうぞ」
「いいですか。……モン　シェール　ペール　アベック　ルコネッサンス。それから行を変えて、……ボートル　フィス　ヴルビアンドラ　シュールマン。これだけです」
Ⅱ音読し終わっても、浜田画伯は黙り込んでいた。
しばらくして、ようやく掠れた声が出た。
「ありがとう。……分かりました」
「どういう意味になりますか？　もし、よろしかったら、参考までに教えていただけませんか」
「……わが父へ感謝をこめて。あなたの息子は、きっとあなたのもとに帰ってきます」
掠れ声のまま、画伯は静かに答えた。心の動揺を隠し切れない様子だった。
「先生は、そう書いて、この肖像画を彼に贈られたのですね。二十二年前に」
「ほんとうに、ありがとう。……よく教えてくださった。歳月は時々、たいへん重要なことを見失わせてしまうようです。申し訳ないが、④二日ほど、わたしをフリーにしてくれませんか？」
「いいですとも。どうぞ、Y心おきなく行ってらしてください。……おやじさんに、よろしく」

（内海隆一郎『待ちわびて』）

問1　二重傍線部a～cの漢字の読みをひらがなで答えよ。
問2　二重傍線部X「気に障る」・Y「心おきなく」の語句の意味として、最も適切なものを、次のア～オのうちからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

X
ア　不安を抱える
イ　配慮に欠ける
ウ　常識を破る
エ　納得できない
オ　不愉快になる

Y
ア　わずかの間でも
イ　満足できるまで
ウ　心配することなく
エ　今すぐにでも
オ　十分に気をつけて

問3　傍線部①「青年は、それらに目を奪われていた」とあるが、ここでの「青年」の説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから選び、記号で答えよ。

ア　飾られた絵がすべて完璧な状態で保管されていることを確認し、店の主人のコレクターとしての意識の高さに驚嘆しながら絵を眺めている。

イ　壁の絵をひとつひとつじっくりと見ていくなかで、それらが「浜田画伯」の作品に間違いないと判断し、安堵しながら絵の評価を始めている。

ウ　飾られている絵のどれもが素晴らしい作品であることに驚き、改めて「浜田画伯」の技量の高さに感心しながら、絵を凝視している。

エ　壁に飾られた絵のひとつひとつに「浜田画伯」の作風を見てとり、彼の初期の作品を目の当たりにした喜びを感じながら絵に見入っている。

オ　壁の絵がすべて「浜田画伯」の作品だと確信しながらも、今の作風と異なる点にも目が向き、その違いを意識しながら絵を鑑賞している。

問4　傍線部②「画伯はまるで他人の作品を品選びするかのように、素早く取捨していった」とあるが、このときの「画伯」がこのような態度をとったのはなぜか。その理由を五十字以内で説明せよ。

問5　傍線部③「カウンターの向こうから、さようなら、お元気で、と二言だけ素っ気なくいっただけだった」とあるが、このときの「老人」についての説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから選び、記号で答えよ。

ア　画家として成功した「浜田画伯」と久しぶりに再会することができ、さらに彼から当時の自分への感謝の思いや「浜田先生」にとって店に来て自分と話すことが生きる支えになっていたことなどを聞かされ、喜びと感動のなかにいたが、絵の選別も終わりいよいよ別れの時となって、あふれ出ようとする惜別の思いを必死にこらえ、気丈に振る舞っている。

イ　絵を選別する「浜田画伯」の態度や言動から、異国の地で名をなした彼にとって、日本にいた時に描き残した絵は見るに耐えないもので、この場所や自分のこともはや過去の郷愁の対象でしかないということを悟るなかで、抱き続けてきた「浜田先生」への親愛の情は過去のものとして封印し、あくまで絵の提供者として距離を置いて接しようとしている。

ウ　「浜田先生」がこの地で生きてきた証として、店の壁に大切に飾り続けてきた絵の数々が、当の本人である「浜田画伯」から酷評され、ひどい扱いをうけたあげくに、そのなかの数点がたった一枚の借用書と引き換えに自分の元から持ち去られていくことに対してどうしようもないやるせなさを覚えながら、人知れずそれらの絵との別れを惜しんでいる。

エ　「浜田画伯」の個展のためとはいえ、店の看板とも言える「浜田先生」の絵を壁から外したうえに、絵の選別の場所として長時間にわたり店のスペースを勝手に使い商売の邪魔をしたにも関わらず、そのことについてなんの謝罪の言葉もなく借用書だけを渡してくる百貨店側の人間の傍若無人な振る舞いに怒りを覚えながらも、平静さを保とうとしている。

オ　絵をぞんざいに扱ったり、描いた絵のことを忘れたりといった「浜田画伯」の態度から、彼が画家としての名声や成功を手に入れた代償として昔の純粋さや謙虚さを失ってしまったことを知り、自分がその帰りを待ちわびていた「浜田先生」はもはやどこにもいないということを悟り、喪失感と失望感のなか、思い出の中の彼にそっと別れを告げている。

問6　波線部Ⅰ「浜田画伯は、胸を突かれる思いがして、青年と顔を見合わせた」から、波線部Ⅱ「音読し終わっても、浜田画伯は黙り込んでいた」に至る「浜田画伯」の心情の変化についての説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから選び、記号で答えよ。

ア　「マスター」が自分の訪問を求めていたことは知らされたものの、それは単に絵を選んでほしいからだと考えていた。ところが、自分が贈った肖像画の裏に記した自分自身の言葉を聞き、彼が求めていたのは、息子としての自分との再会だったということを思い知らされるなかで、あらためて自身の「セザンヌ」での振る舞いの非礼さを深く恥じている。

イ　「マスター」が自分の帰りをただ待ちわびるだけの生活を送っていたことを知り、心配になっていた。ところが、自分が贈った肖像画の裏に記した自分自身の言葉を聞き、当時の自分と彼との関わりが家族以上のものであったということを思い知らされ、彼にとっての自分が今もなおかけがえのない存在であり続けていることの意味をあらためてかみしめている。

ウ　「マスター」が自分との関わりの深さを周囲に吹聴していることを知らされ、怒りや苦々しい思いを抱いていた。ところが、自分が贈った肖像画の裏に記した自分自身の言葉を聞き、そのような「マスター」の言動を招いたのが、実は彼の肖像画と昔の自分の思わせぶりな言葉だったということを思い知らされ、あらためて、昔の自分の軽率さにあきれはてている。

エ　「マスター」が自分に会いたがっていたことは知らされたものの、それは自分には無関係なことだと考えていた。ところが、自分が贈った肖像画の裏に記した自分自身の言葉を聞き、彼の願いのもとになっているのが自分の約束だったことを思い知り、あらためて、感傷に流され安易な約束をしてしまい、「マスター」を翻弄してしまったことを猛省している。

オ　「マスター」が自分の帰りを信じ、熱望していたことを知らされ、その思いの強さに、驚きと戸惑いを覚えていた。ところが、自分が贈った肖像画の裏に記した自分自身の言葉を聞き、彼の再会への思いに自分が大きく関わっていたことを思い知らされるなかで、あらためて、「マスター」の態度が豹変したことの意味がわかり、自身の愚かさをかみしめている。

問7　傍線部④「二日ほど、わたしをフリーにしてくれませんか？」とあるが、では「画伯」はその時間でどういうことをしようと考えているのか。七十五字以内で説明せよ。

三　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

和邇部用光（わにべのもちみつ）といふ楽人（がくにん）ありけり。※1土佐の御船遊びに下りて、上りけるに、※2安芸（あき）の国、なにがしの※3泊（とまり）にて、海賊押し寄せたりけり。弓矢の行方知らねば、防ぎ戦ふに力なくて、①「今はうたがひなく殺されなむず」と思ひて、※4篳篥（ひちりき）を取り出でて、屋形の上にAゐて、「あの党や。今は沙汰に及ばず。とくなにものをも取り給へ。ただし、B年ごろ、思ひ占めたる篳篥の、※5小調子（こてうし）といふ曲、吹きて聞かせ申さむ。さることこそ、ありしかとのちの物語にもし給へ」とaいひければ、※6宗（むね）との大きなる声にて、「主（ぬし）たち、しばし待ちb給へ。かくいふことなり。もの聞け」といひければ、船を押さへて、Xおのおのしづまりたるに、用光、「②今はかぎり」とおぼえければ、涙を流して、めでたき音を吹き出でて、吹きすましたりけり。

をりからにや、その調べ、波の上にひびきて、かの※7潯陽江（じんやうかう）のほとりに、琵琶を聞きし昔語りにことならず。Y海賊、静まりて、いふことなし。

よくよく聞きて、曲終りて、先の声にて、君が船に心をかけて、寄せたりつれども、曲の声に涙落ちて、かたさりぬとて、漕ぎ去りぬ。

（『十訓抄』）

※1　土佐の御船遊び――現在の高知県にある土佐神社の祭り。
※2　安芸の国――現在の広島県。
※3　泊――港。
※4　篳篥――雅楽の管楽器。
※5　小調子――篳篥の秘曲。
※6　宗と――主だった者。海賊の頭領を指す。
※7　潯陽江――長江の別称。白楽天が、このほとりで琵琶の演奏を聞き、「琵琶行」という漢詩を作った。

問1　二重傍線部a「いひければ」・b「給へ」の読みをそれぞれすべて現代かなづかいで答えよ。

問2　波線部A「ゐて」・B「年ごろ」の意味として最も適切なものを、次のア～オのうちからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

A
ア　叫んで
イ　射て
ウ　投げて
エ　吹いて
オ　座って

B
ア　少年の頃
イ　毎年毎年
ウ　長年の間
エ　年末の時
オ　今年一年

問3　本文中には会話文ではあるが「　」がついていないところがある。それを三十字程度で抜き出し、最初と最後の三字を答えよ。

問4　傍線部①「『今はうたがひなく殺されなむず』と思ひて」とあるが、このときの用光の説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから選び、記号で答えよ。

ア　海賊が襲ってきたが、弓矢にの扱い方も分からないため、間違いなく殺されてしまうだろうと悲嘆にくれている。
イ　海賊が迫ってきたが、敵の弓矢の数が圧倒的に多いため、せめて苦しむことなく殺されたいと願っている。
ウ　海賊がおしよせてきたが、敵の弓矢がなかなか当たらないため、殺されはしないだろうと気楽に構えている。
エ　海賊に襲われたが、護衛の弓矢だけでは倒せそうにないため、自分も敵を殺さねばならないと覚悟している。
オ　海賊に囲まれたが、防御に使う弓矢が見当たらないため、篳篥で戦ってでも殺されまいとあがいている。

問5　傍線部②「今はかぎり」とあるが、このときの用光の説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから選び、記号で答えよ。

ア　海賊への恐怖心を抑えきれない中で、今吹ける数少ない曲を演奏しようとしている。
イ　自分の人生の終わりを覚悟し、悲壮感を抱きながら最後の演奏に臨もうとしている。
ウ　珍しい演奏の場を得たことに興奮し、良い演奏になるよう全力を尽くそうとしている。
エ　演奏時間が刻一刻と減るため焦燥感に襲われつつも、落ち着いて奏でようとしている。
オ　どんな演奏も一期一会のものだと考え、悔しさを感じながらも真摯に吹こうとしている。

問6　傍線部X「おのおのしづまりたる」・Y「海賊、静まりて」とあるが、この二つの場面でなぜ海賊達は静かになったのか。その理由をそれぞれ説明せよ。